

美濃地方における湖東式軒瓦の展開

～特に、各務原・加茂地区を中心として～

大塚 章

On the Distribution of “Koto-style Nokigawara” in Mino Province,
—especially focused on Kakamigahara and Kamo Area.—

Akira OTSUKA

1. はじめに——湖東式軒瓦の様式と分布

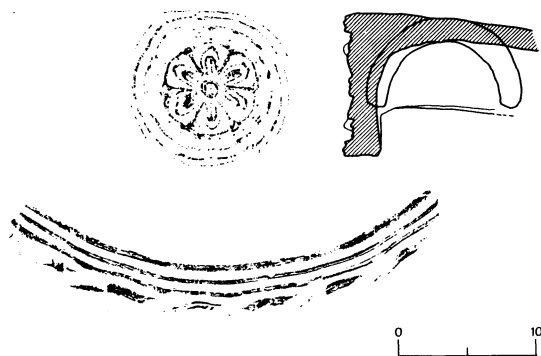
本稿でテーマとしてあつかういわゆる“湖東式”軒瓦は、別名を軽野寺式、あるいは近江様式とよばれる古代瓦の一つの様式名で、それぞれに特徴のある軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせである。すなわち軒丸瓦は、六弁を主体とする単弁重弁の蓮華文瓦で、比較的小さな径の中房が突出してあり、その周囲には環状に珠文が巡らされるとともに、外区内縁にも珠文を置くことを原則としている。また、この様式の軒丸瓦は、花卉・子葉あるいは間弁などの文様を深く描き出し、全体に厚みのある印象を与えることも特徴の一つとなっている。一方、軒平瓦は、重弧文瓦の下端部に指を押し当てて波状の文様を描き出したもので(指圧波状文軒平瓦)、波状文の付け方などによりさらにいくつかの型式に分類されている¹⁾(図1)。

この湖東式軒瓦は、その名が示すように滋賀県東部(湖東地域)、特に愛知郡・蒲生郡の古代寺院に集中して見られる軒瓦である。また、一部は湖北地域にも及んでいるが、この地域では軒丸瓦だけで軒平瓦は伴わない。しかし、湖東式軒瓦の分布は近江のみに限定されたものではなく、滋賀県外にもいくつかの出土例が報告されている。最近の例では、福井県の小粕古窯跡より、湖東式の軒丸瓦と軒平瓦がセットで発掘された。そして、この湖東式軒瓦のもう一つの出土地が岐阜県的美濃地方である²⁾。

美濃地方における湖東式軒瓦の出土地としては、『小粕窯跡発掘調査報告書』では、各務原市・平蔵寺跡(軒丸瓦)と加茂郡坂祝町・輪形古窯跡(軒丸瓦)、それに現在は岐阜県であるが当時は尾張国に属したとされる羽島郡笠松町の東流廃寺(軒平瓦)をあげている。同報告書は、以上のほかに東流廃寺および美濃加茂市・元薬師寺跡の軒丸瓦も紹介しているが、この二つについては湖東式に入らない可能性が高いとの見解を示している。一方、最近、美濃国の古代瓦の集成を行った井川祥子氏の論考では、これらも含めて湖東式軒瓦として扱っている³⁾。

筆者は、平成7年度秋季特別展『美濃・飛騨の古代史発掘』に関わる調査を通して県内の数多くの古代瓦を見る機会を得たが、その中から、本稿では、この湖東式軒瓦の岐阜県における展開について若干の報告を行いたい。

ところで、この湖東式軒瓦は、百済・新羅の系譜をひく瓦で、いわゆる渡来人が、畿内を経由す



*『軽野遺跡発掘調査報告書』より

図1 軽野塔ノ塚廃寺出土の湖東式軒瓦

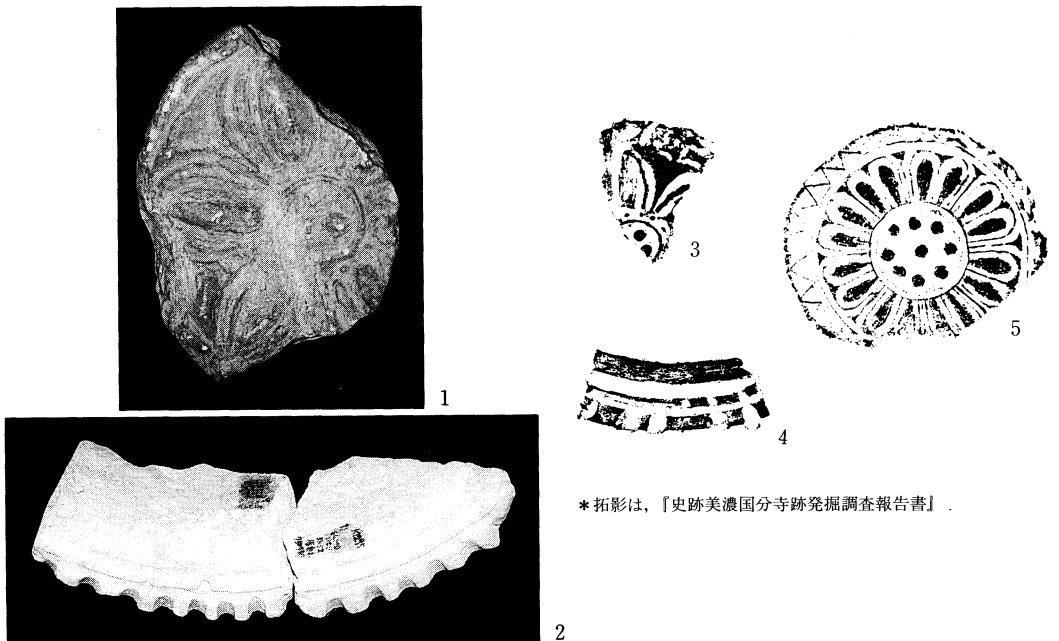
ることなく直接導入した瓦と位置づけられており——例えば湖東地域の場合は、郡名（愛知郡）の由来となった依知秦氏えちあしの存在と結びつけられて考えられている——，また、瓦の年代観は白鳳時代とすることが一応の定説となっている⁴⁾。いまここで美濃地方における湖東式軒瓦の分布についての考察を行うことは、文献資料の乏しさなどから解明が立ち遅れている古代の郷土の姿、特に渡来系氏族の在り方を探る一助となることを期待したためである。

2. 美濃国分寺跡——湖東式軒瓦の可能性

現在までに知られている岐阜県内の古代寺院・瓦窯などは、美濃・飛驒あわせて60か所ほどである⁵⁾。このうち湖東式軒瓦の分布は、先述したように美濃地方に限られている。飛驒地方の古代寺院は、単弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦を基調とはしているものの、湖東式軒瓦とは系譜を異にしており、現在までのところ湖東式と認定できるものはない。一方、美濃地方の湖東式軒瓦の分布も、各務原・笠松と加茂地区のものが一般には知られているのみである。本稿の主眼もこの両地域における湖東式軒瓦の考察にあるのだが、いま一件、注目に値する軒瓦が西濃地域の美濃国分寺瓦の中にあるので、報告しておこうと思う。

美濃国分寺の軒瓦は、軒丸瓦6型式・軒平瓦5型式を数える⁶⁾。このうち軒平瓦Ⅲ類の単弁六弁蓮華文軒丸瓦は、直径3.1cmの比較的小型の中房（蓮子数は3）の周囲に珠文（13か？）を配する。外区内縁の珠文は認められない。出土点数が少ないうえに、瓦当面の摩耗も激しいため、外区の様子など不明瞭な点も多いが、重弁となった花卉の厚みは感じられる。湖東式軒丸瓦である可能性も考えることができるが、平安時代に下るとされているこの瓦の年代観も含めて、今後の検討を待ちたい。（図2の1・3）。

一方、美濃国分寺の軒平瓦Ⅰ類は、三重弧文軒平瓦の下端の弧に文様を施している。この施文は、「等間隔で切り込みを入れ小波状にしている⁷⁾」，あるいは、「顎部に棒状工具による圧痕がみられ



* 拓影は、『史跡美濃国分寺跡発掘調査報告書』。

図2 美濃国分寺出土軒瓦 1 軒丸瓦Ⅲ類（写真） 2 軒平瓦Ⅰ類（写真） 3 軒丸瓦Ⅲ類拓影
4 軒平瓦Ⅰ類拓影 5 軒丸瓦Ⅰ類拓影

る⁹⁾と表現されている。筆者の観察では、確かに鋭い感じはあるが、「切れ込み」ではなく「圧痕」とすべきかと思われる。ただ、その圧痕が、棒状工具によるものか、あるいは指頭圧痕なのかは判断できなかつた。しかし、仮にこの圧痕が指頭によるものであっても、圧痕が瓦の中心点から放射線状に施されていることなどから、直ちに湖東式軒平瓦と認定することは難しい。現段階では、重弧文軒平瓦の下端に圧痕を施すという湖東式軒平瓦と同じ製作の志向性をもつ軒平瓦が、美濃国分寺から出土していることを指摘しておくに止める(図2の2・4)。

なお、この軒平瓦Ⅰ類は、美濃に多い川原寺式の系譜を引く複弁八弁蓮華文軒丸瓦(軒丸瓦Ⅰ類)と組み合わせられており、このセットは国分寺の造営に先行する寺院の瓦と見なされている。この美濃国分寺前身寺院は、白鳳～奈良初期のものとしており、時期的には湖東式軒瓦の年代観と適合するが、様式のまったく異なる川原寺式系の複弁軒丸瓦と組み合わせられたことが問題となってくる(図2の5)。

美濃国分寺跡から出土する瓦は、軒丸瓦では素弁・重弁・複弁、軒平瓦では重弧文・唐草文・素文と、極めて多様である。そしてその中には、ここでとりあげた圧痕のある軒平瓦や、中房周囲に珠文を置く軒丸瓦など、周囲の古代寺院には見られない特異な瓦も存在する。その前身寺院も含めて美濃国分寺の中には、さまざまな系譜を持った瓦が複合的に流れ込んでいたことが分かる。このことは、ひとり美濃国分寺だけでなく美濃国の古代寺院全体の性格を考える際の有効な視座となろう。今後のさらなる調査・研究が期待される。

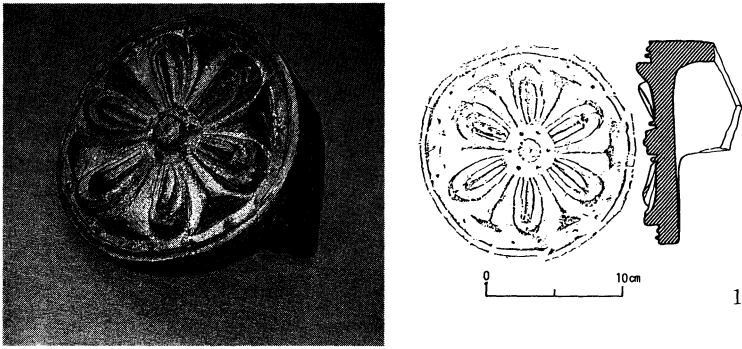
3. 平蔵寺跡と東流廃寺——各務原周辺の湖東式軒瓦

美濃国で、湖東式軒丸瓦をもつ古代寺院として必ず取りあげられるのが、平蔵寺跡(各務原市蘇原熊田町)である。平蔵寺跡出土の軒瓦としては、軒丸瓦3型式と2種類の重弧文軒平瓦が知られている⁹⁾。軒丸瓦は、単弁六弁蓮華文瓦(Ⅰ類)、細弁十二弁蓮華文瓦(Ⅱ類)と複弁八弁蓮華文瓦(Ⅲ類)であるが、そのうちのⅠ類の単弁瓦が湖東式軒丸瓦と認定されている。詳細は別表によるが、県内の他の湖東式軒丸瓦や小粕窯産のものより近江・湖東地方の典型例に近い特徴を備えており、美濃国における湖東式軒丸瓦の基礎となったとの見解も提出されている¹⁰⁾(図3の1)。

この平蔵寺跡の出土瓦の在り方は、その西方約600mに位置する山田寺跡(各務原市蘇原寺島町)と共通するところが多い。すなわち平蔵寺跡のⅢ類複弁瓦は、山田寺跡軒丸瓦Ⅲ-A b類と同範であり(図3の2・3)、加えてその複弁瓦の顎部にヘラで唐草文などを描き出す手法も共通している。これは、各務郡に展開する古代寺院が、山田寺跡を中心として主に川原寺式複弁瓦の同範関係で互いに結ばれていることの典型的な事例となっている¹¹⁾。

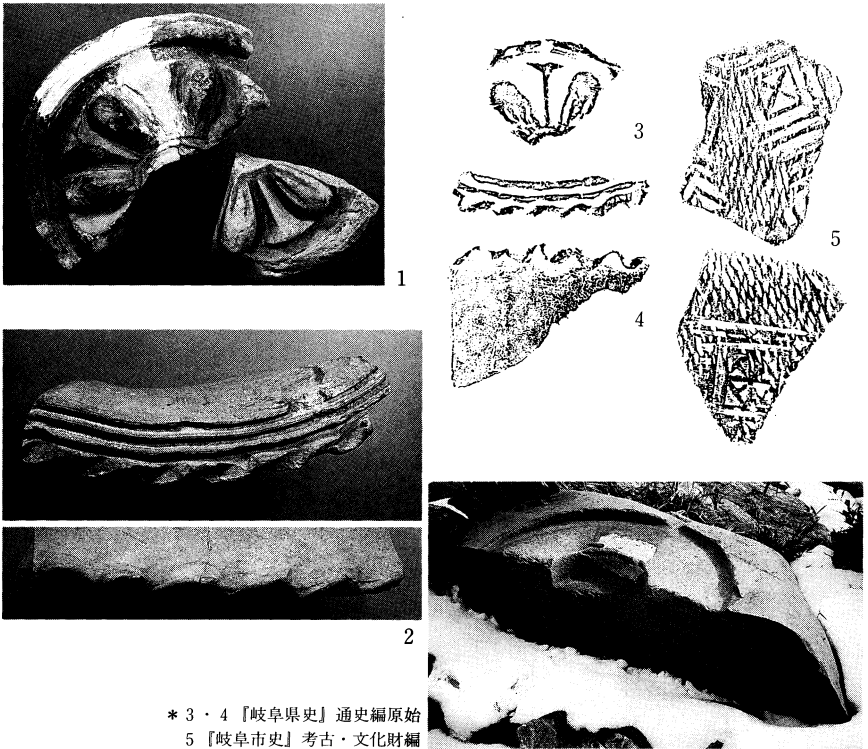
両寺院跡の相似性は、軒丸瓦の構成にも及んでいる。すなわち山田寺跡の軒丸瓦は、大きく単弁八弁瓦(Ⅰ類)、細弁十二弁瓦(Ⅱ類)、川原寺式系の複弁八弁瓦(Ⅲ類)およびその退化型(Ⅳ類)に分類されているが¹²⁾、Ⅳ類は別として、Ⅱ類・Ⅲ類とは平蔵寺跡のⅡ類・Ⅲ類と同一の構成で、ともに複弁瓦が出土瓦の主体となっている。問題は、残った山田寺跡のⅠ類瓦だが、この瓦は外縁に輻線文を配した特殊な瓦である(図6の8)。この輻線文縁軒丸瓦は、近江、特に大津市北郊の飛鳥・白鳳寺院に見られ、それら寺院は渡来系氏族の造立になるものと考えられている¹³⁾。湖東式軒丸瓦をもつ平蔵寺跡に近接する山田寺跡から、別系統であるとは言え近江系の、しかも渡来系氏族と密接に結びつく瓦が出土することは、興味深い事実である。

各務原一帯を基盤としていた古代氏族としては、村国氏や各務勝^{すぐり}氏が知られている。彼らは、渡来系氏族とされている。各務郡は台地上に展開した土地で、例えば美濃国内の先進地帯である西濃に比べれば、土地の生産性も低かつたと思われる。条里制の展開の様子を見ても、西濃地域には広域条里が見られるのに対して、各務郡では小規模条里が複雑に集合しており、かつ生産性に劣る湿



・拓影は『各務原市史』考古編による

図3 平蔵寺跡出土の軒瓦
 1 湖東式軒丸瓦（I類・足立光也氏所蔵）と拓影 2 複弁八弁軒丸瓦（III類）
 3 山田寺複弁八弁軒丸瓦（2と同範） 4 頭に波状文を施した軒平瓦



* 3・4 『岐阜県史』通史編原始
 5 『岐阜市史』考古・文化財編

図4 東流廃寺出土瓦
 1 軒丸瓦（左：小川雅巳氏蔵） 2 軒平瓦（下は凸面顎部）
 3・4 拓影 5 平瓦（方形状叩き） 6 塔心礎（白髭神社境内）

田の割合も高い¹⁴⁾。この各務原地域の開発を担当したのが彼ら渡来人で、同時に、この地の窯業生産を領導し、発展させた主体も彼らであったと推測できる。岐阜市から各務原市にかけての丘陵に広く展開する美濃須衛古窯跡群は、瓦陶兼業窯として知られるが¹⁵⁾、各務郡およびその周辺の古代寺院は、ここの窯業生産を背景にして成立したものである。その意味において、地域の中核的寺院である平蔵寺跡や山田寺跡で出土した湖東式軒丸瓦や幅線文縁軒丸瓦は、村国氏や各務勝氏などの渡来系氏族の各務原への定着と、ここを舞台とした彼らの経済・文化活動を象徴するものである。

なお、美濃須衛古窯跡群の中で、厚見寺跡（岐阜市寺町）に瓦を供給したことで名高い柄山古窯跡群（各務原市那加柄山町）は、凸面に文字や花鳥文などの文様の叩きを施す平瓦を生産したことで知られる¹⁶⁾。平蔵寺跡から採取された平瓦にもこれに似た花文瓦があり、あるいは平蔵寺跡の瓦はここで生産されたものかとも考えられる。

この柄山窯をはじめとして当地で生産された瓦は、美濃国内だけでなく尾張国にも供給されている。例えば美濃須衛古窯産と伝えられる単弁蓮華文瓦と、愛知県佐織町の諸桑廃寺出土のものが同範であるが、こうした瓦の交流には、木曾川の水運が利用されたものと考えられる。この木曾川水運にも、渡来系氏族は大きく関与していたのであろう。時代は下るが、貞観8年（866）、美濃と尾張の国境をなす木曾川の流路変更にもなって美濃・尾張両国間で生じた抗争事件（＝広野河事件）の主謀者となったのが各務勝氏で、彼らは各務郡だけでなく厚見郡の郡司となって木曾川右岸一帯を掌握していた¹⁷⁾。また、各務勝氏とともに各務郡を拠点とする村国氏も、尾張国に勢力を張っていた。『和名類聚抄』には、美濃国各務郡のほか尾張国葉栗郡にも村国郷をあげているが、この尾張国の村国郷は、木曾川を挟んで各務原市の対岸に位置する愛知県江南市村久野付近に比定されている。ここには村国氏の氏寺と伝える音楽寺があり、山田寺跡Ⅱ類瓦に近い細弁十二弁軒丸瓦も出土している。さらには、美濃須衛古窯跡群に属する老洞古窯（岐阜市芥見）で生産されたいわゆる「美濃（国）」刻印須恵器も、木曾川左岸（愛知県側）一帯に数多く発見されている¹⁸⁾。このように行政的な国境あるいは郡境を越えたより広範囲の交流圏を設定することも、この時期の郷土を考える際の重要な視点となってくるであろう。

こうした意味で、古くは尾張国に属した東流廃寺（羽島郡笠松町田代）の存在は注目に値する。ここで採集された平瓦には厚見寺跡と共通する方形の叩きが施されているものがあり、柄山窯＝美濃国から瓦の供給をうけた寺院の一つであったと考えられる¹⁹⁾。その意味では、美濃国（岐阜・各務原地区）の古代寺院の中に入れて考えてもよい寺院跡であろう。この東流廃寺の軒平瓦は、指圧波状文をもつ重弧文瓦で、以前より湖東式軒平瓦として意識されてきた²⁰⁾。四重弧文で、親指によって右上がりの圧痕を施している（図4の2・4）。

この東流廃寺で問題となるのは、同時に出土する軒丸瓦の評価であろう。先述したように、これを湖東式には含めないとの見解もあるが、井川氏などは「湖東式の可能性が高い」とし、また、平蔵寺跡出土の瓦に比べて“退化”したものとみている²¹⁾。

今回、既に知られていた10cmほどの小片（図4の1右）に加えて、笠松町歴史民俗資料室に保管されている小川雅巳氏所蔵の瓦片を調査する機会を得た（同左）。これら2点を検討してみると、間弁の発達、肉厚な重弁の様子など湖東式軒丸瓦の特徴を表しているように思われる。さらには、中房の周囲の珠文帯となる圏線が明確にできたのも収穫であった。たしかに中房の周囲と外区内縁に珠文が置かれておらず、その点では湖東式軒丸瓦の最大ともいえる特徴を欠いていることになるが、その珠文を配するスペースは確保されていることを評価したい。ただ、他の湖東式軒丸瓦に比べて、やや大ぶりなことが少々気になることである。珠文がないことを退化ととらえうるかどうかも含めて、湖東式軒瓦の系譜・型式についての議論を深めるとともに、現地でのさらなる調査を待ちたいが、この軒丸瓦とセットとなる湖東式軒平瓦の存在や、湖東式軒丸瓦を出土する平蔵寺跡および

瓦の供給センターであろう美濃須衛古窯跡群との距離的な近さも勘案して、本稿では、一応、この東流廃寺軒丸瓦を湖東式瓦と考えておきたい。

4. 輪形古窯跡と元薬師寺跡——加茂郡の湖東式軒瓦

美濃地方の湖東式軒瓦の分布地のもう一つは、加茂郡にある。輪形古窯跡（加茂郡坂祝町深萱字輪形）と元薬師寺跡（美濃加茂市加茂川町）の2遺跡が知られている。

輪形古窯跡からは、六弁（Ⅰ類）と八弁（Ⅱ類）2型式の単弁蓮華文軒丸瓦片が採集されている²²⁾。このうちⅠ類六弁瓦は、中房周囲に6、外区内縁に12の珠文を配置しており、また、厚みのある重弁や間弁の様子などから湖東式とよぶにふさわしい軒丸瓦である。ただ、中房周囲の珠文帯をつくる圏線や花卉を縁どる輪郭線は認められず、外区内縁の珠文数も近江・湖東地方の典型例に比べて少ない。省略あるいは退化とするべきだろうか²³⁾（図5の1）。

もう一つの八弁瓦は、さらに簡略化されており、中房周囲にも外区内縁にも珠文を置かない。ただ、中房と花卉、花卉と周縁部の間には、珠文帯をつくるに十分なスペースをとっているし、拓影を見る限り、不明瞭ではあるが中房周辺に圏線らしきものが認められる。花卉の数こそ違いますが、形式的には先述の東流廃寺のものと同じタイプの軒丸瓦であるといえよう²⁴⁾（図5の2）。

元薬師寺跡からは3型式の軒丸瓦が採集されているが、ほとんどが小片で、詳しい様式の設定は難しい状態にあった。そのうちの一つで六弁と推定されている瓦（Ⅰ類）は、厚みのある重弁瓦で、これを湖東式とする可能性も指摘されている²⁵⁾。今回、美濃加茂市立西中学校における調査のなかで、その保管資料の中から一片の瓦を見つけた。この瓦は、既知のⅠ類瓦片と適合した瓦であるので、その紹介もかねて、改めてⅠ類瓦の検討をしてみたい²⁶⁾（図6の1・2）。

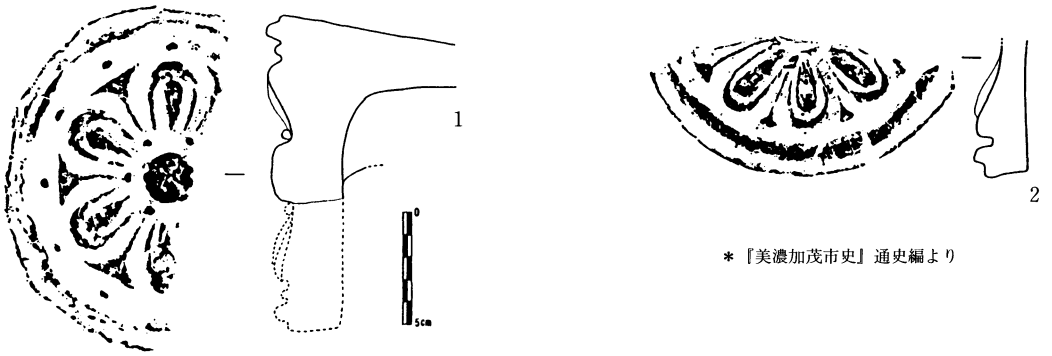
この新出の瓦片から推定すると、Ⅰ類瓦は、当初予想されたとおり六弁の重弁瓦であることがわかる。中房周囲に6、外区内縁には痕跡などで推計しておそらく12の珠文をもっており、以上の特徴から湖東式軒丸瓦と認定して問題ないと思われる。

さらに、この元薬師寺跡Ⅰ類瓦は、先述の輪形窯Ⅰ類瓦と同範である可能性が極めて高い。輪形窯瓦の拓影などと比較してみる限りでいえば、①15cm前後と推定される瓦当直径を始めとする各部位のサイズ、②中房周辺の珠文が間弁の根元に、一方の外区内縁の珠文が花卉と間弁の頭頂部につくという珠文配置の様子、③そして中房周辺の圏線や花卉の輪郭線を欠くなどの型式上の特徴、等々二つの瓦に共通する部分は非常に多い。

一方、最近、研究者グループにより、元薬師寺跡出土とされる軒丸瓦の拓本が紹介されたので、これについて少々言及しておく²⁷⁾（図6の3）。その拓影によると、その瓦（Ⅱ類）は、単弁八弁の軒丸瓦で、厚みを感じさせる重弁の花卉をもち、間弁はやや細い。中房とその周囲の様子は判断できないが、花卉と周縁部の間隔を広くとっている。拓影ゆえ誤差も大きいだろうが、直径は15cm前後と推計できる。形式的には輪形古窯跡Ⅱ類瓦と同型式で、拓影全体の様子なども輪形窯Ⅱ類瓦に近似している。あるいは同範である可能性も考えられる。元薬師寺跡Ⅰ類およびⅡ類瓦についての以上の推測が許されるなら、元薬師寺跡は、輪形古窯跡と瓦の需給関係で強く結ばれることとなる。

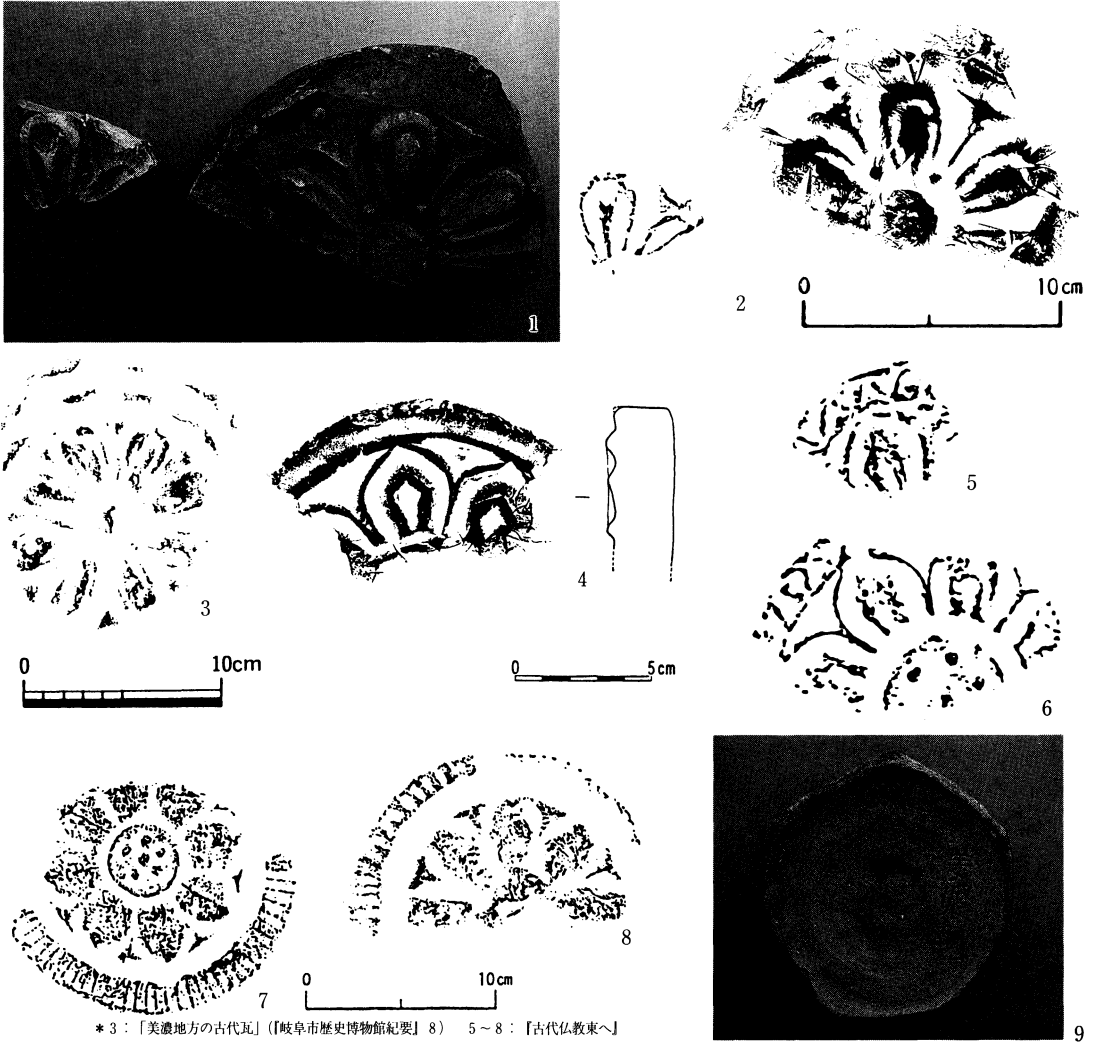
元薬師寺跡出土瓦の最後の一つは、花卉の先端が角ばった八弁瓦（Ⅲ類）であるが、これと同じ意匠を有する瓦が、木曾川を渡った可児郡の伏見廃寺・願興寺跡・送木廃寺（ともに御嵩町）にある²⁸⁾（図6の4～6）。この瓦の時期は8世紀末以降まで下るとされており、単純に8世紀前後とされる湖東式軒瓦と同列に論ずることはできないが、元薬師寺跡を介して、加茂郡から可児郡にまたがる古代寺院の広域的なまとまりが想定できる²⁹⁾。

こうした加茂地区における湖東式軒丸瓦の分布の背景には、各務郡の項でも考察したような渡来系氏族の展開があったと思われる。幸い『正倉院文書』の中に「大宝二年（702）御野国加毛郡半布



*『美濃加茂市史』通史編より

図5 輪形古窯跡の軒丸瓦 1 六弁 (I類) 2 八弁 (II類)



* 3: 『美濃地方の古代瓦』(『岐阜市歴史博物館紀要』8) 5~8: 『古代仏教東へ』

図6 元薬師寺跡の軒瓦と可見の古代寺院 1・2 元薬師寺跡六弁瓦 (I類)
3 八弁瓦 (II類) 4 単弁瓦 (元薬師寺跡) 5 同 (伏見廃寺) 6 同 (送木廃寺)
7 幅線文縁軒丸瓦 (願興寺跡) 8 同 (山田寺) 9 『美濃国』刻印須恵器 (美濃加茂市出土)

里戸籍」があり、総計54戸・1,119人分の記載が残っている。半布里は、現在の加茂郡富加町夕田・羽生地区を中心とした一帯に比定されており、いま問題としている加茂郡の古代氏族の大まかな動向を知るには格好の史料となっている。

「半布里戸籍」によると、半布里54戸は県主グループ（県造・県主・県主族）20戸と、秦人・秦人部グループ22戸の二大勢力に大別できる。このうち前者の県主グループは、旧来からこの地に定着していた集団で、武義郡に根柢をもつムゲツ（身毛・牟義都）氏一族とも強い婚姻関係で結ばれている。一方の秦人グループは、言うまでもなく新羅系の渡来人の系譜をひく集団である。「半布里戸籍」には、ほかに漢人・漢人部、勝・勝族・不破勝族・各務勝族などの名前が見えるが、これら渡来系の人々は、ある時期、大和政権によって諸国に編入させられたものの一部で、織物や鉄製品など在地における手工業生産の担い手としての役割も果たしていたと考えられる³⁰⁾。

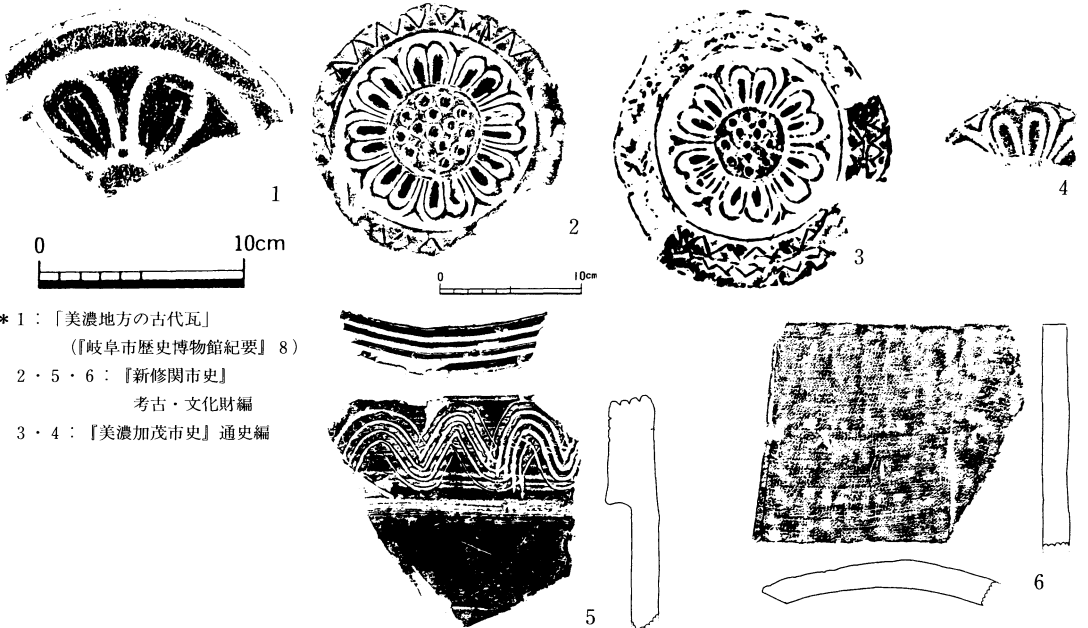
県主グループを中核とする在地勢力と、秦人などの渡来人集団が、加茂郡内においてどのように住み分けていたかを知ることは難しいが、先住の県主グループが確保した優良地の周辺部に、渡来系の人々の活動拠点が展開していたものと推測できる。県主グループについては、美濃加茂市太田町にある県主神社が一族の氏神で、この一帯が彼らの本拠地とされている。その東に矢田廃寺があり、ここからは関市・弥勒寺跡の複弁八弁軒丸瓦（図7の2）に連なると見られる複弁六弁瓦が出土している（図7の3）。弥勒寺は、県主グループとも関係の深いムゲツ氏の氏寺とされる寺で、複弁軒丸瓦とともに凸面布目平瓦を出土して美濃国の古代寺院の主流とも言うべき川原寺系寺院の代表的存在となっている³¹⁾。

ここで、県主グループ＝川原寺式複弁軒丸瓦という図式に対して、秦人など渡来人集団の採用した瓦が、湖東式瓦であったとの仮説が立てられないだろうか。実際、元薬師寺跡のある一帯は、木曾川に加茂川が流れ込む低湿な場所で、河川氾濫による浸水・冠水などが起きやすい土地である。段丘面上に立地する県主神社・矢田廃寺などに比べて、土地条件的には恵まれているとはいえない。逆に、こうした土地だからこそ渡来系氏族のもつ技術力に期待がかけられたとも言えようが…。

以上の推測が許されるなら、この渡来系氏族の寺院である元薬師寺跡に瓦を供給したと思われる輪形古窯跡もまた渡来系氏族によって運営されたとみるべきであろう。前節で、各務勝氏・村国氏などの渡来系氏族と美濃須衛古窯跡群における窯業生産との関係について言及したが、同じことがこの輪形古窯にも当てはまる。さらに、輪形古窯跡それ自体も美濃須衛古窯跡群の範囲に含めて考えることもできる。輪形古窯のあるカナクズ山は独立した山丘であるが、美濃須衛古窯跡群が展開する各務原丘陵に正対しており、各務原丘陵の東端を構成するといってもよい。そしてこの地は、東西方向には各務郡と加茂郡を結ぶ峠越えの道が、南北方向には加茂郡・武義郡間のいく筋かの道が交差するところであり、こうした立地は、美濃須衛古窯跡群のある各務原丘陵の条件とも共通している。もちろん、南の木曾川、北の長良川と、河川の水運にも至便の地でもある。そしてこの加茂郡内の各所からは、「美濃（国）」刻印須恵器も数多く採取されている³²⁾。

加茂郡における湖東式軒丸瓦について考えてきたが、これに補足して、隣接する武義郡の湖東式軒丸瓦について簡単に紹介しておく。湖東式瓦が出土したのは、前に取り上げた弥勒寺跡（関市池尻）である。問題の湖東式軒丸瓦は、昭和31年の発掘調査で1点のみ見つかったものだが、その後の所在は不明となっている。最近その拓本が紹介されたが³³⁾（図7の1）、それによると六弁の重弁瓦で、中房の周囲、間弁の付け根に珠文が置かれる。ここまでの様式は、輪形古窯跡・元薬師寺跡の六弁瓦と同一であるが、拓影でみる限り外区内縁の珠文はない。中房周囲・外区内縁ともに珠文をもたない東流廃寺や輪形古窯跡・元薬師寺跡の八弁瓦などへ移行する過渡的なものだろうか。

また、弥勒寺跡からは顎に五重の波状の文様を描き出す重弧文軒平瓦も出土している（図7の5）。この型式の平瓦は平蔵寺跡にも見出せる³⁴⁾。川原寺式が主体となった瓦群の中に他系統の瓦が混在



*1: 『美濃地方の古代瓦』
 (『岐阜市歴史博物館紀要』8)
 2・5・6: 『新修関市史』
 考古・文化財編
 3・4: 『美濃加茂市史』通史編

図7 弥勒寺跡の瓦類 1 弥勒寺跡出土単弁瓦拓影 2 川原寺式複弁瓦(弥勒寺跡)
 3 同(矢田廃寺) 4 同(雲埋遺跡) 5 頭に波状文のある軒平瓦 6 凸面布目平瓦

美濃地方の湖東式軒丸瓦比較表

No.	遺跡名 (型式)	瓦当部径	中房径	中房内 蓮子数	中房周囲の 珠文数	中房周囲の 圈線	蓮弁数	弁の輪郭 線の有無	内区径	外区内縁の 珠文数	残存状況 (調査資料)	備考
A	平蔵寺跡 (I類)	15.0	2.0	1	6	有	6	無	12.4	18	完形	
B	東流廃寺	(20.2)	(3.8)	不明	無	有	6	無	(14.5)	無	1/2	湖東式軒平瓦伴出 旧尾張国
C	輪形古窯跡 (I類)	(15.5)	(2.3)	不明瞭(1+?)	6	無	6	無	(10.8)	12	拓影=3/5	
	(II類)	(14強)	(2前後)	不明	無	有	8	無	(10前後)	無	拓影=2/5	
D	元業師寺跡 (I類)	(15前後)	(2.4)	不明	6	無	6	無	(10.7)	12か?	1/2弱	輪形古窯跡I類と同范か?
	(II類)	(15.8)	(2前後)	不明瞭	無	不明瞭	8	無	(11前後)	無	拓影=4/5程度	輪形古窯跡II類と同范か?
E	弥勒寺跡	(16強)	2.5前後	不明	6	無	6	無	(12前後)	無	拓影=1/3	
F	美濃国分寺跡 (III類)	(16.8)	(3.4)	3	13か?	有	6	無	(14.5)	無	1/3弱	湖東式? 波状文軒平瓦伴出
参考1	軽野塔ノ塚廃寺(Aa)	10.3	1.9	1(不明瞭)	9	有	6	有	6.5	21	—	滋賀県湖東地域
	(Ab)	15.6	2.4	1	7	有	6	有	12.3	約26	—	湖東式軒平瓦伴出
参考2	井口廃寺 (I類)	16.2	2.7	1+4?	15	有	8	有	12.4	約48	—	滋賀県湖北地域
	(II類)	18.3	3.5	1+4?	約12	有	8	有	14.6	約16	—	湖東式軒平瓦伴出せず
参考3	小箱窯跡	15~15.5	1.7~2	1+8	12	有(不明瞭)	6	有	11~11.6	36	—	福井県 湖東式軒平瓦伴出

() は、推計。(斜体数字) は、拓影などによる類推値。

するという山田寺跡や平蔵寺跡の瓦の構成に似た様相を、この弥勒寺跡もみせている。こうした弥勒寺跡の瓦の構成は、ムゲツ氏と、各務原の各務勝氏・村国氏、加茂郡の秦人グループなど近隣の渡来系氏族との交流を示すものと評価しておきたい。

弥勒寺跡=ムゲツ氏=壬申の乱の論功行賞としての川原寺式寺院の造営という従来の考え——それ自体は基本的には承認できる説ではあるが——からすれば、弥勒寺跡における湖東式軒丸瓦の存在は奇異に映る。しかし、美濃須衛古窯跡群の各窯がおそらくそうであったように、一つの瓦窯で

何系統もの瓦を並行して生産することは決して珍しいことではなかったであろう。一方、供給をうける寺院も、程度の差こそあれ、一つの様式の瓦にこだわることは少なかっただろう。美濃国における伝統的氏族の代表ともいえるムゲツ氏の場合も、渡来系氏族の進出などの在地の動きから超然として存続することはできなかつた、そんな「時代の姿」を、弥勒寺跡出土の湖東式軒丸瓦は表現しているとも感じられる。

湖東式あるいは川原寺式と、さまざまな系譜を持つ瓦は、在地において相互に影響を与えあい、それぞれが変容していく。こうした在地における変化を、“簡略化・退化”ととらえるかどうかの議論はひとまずおくとして、さまざまな系譜を持った瓦が包摂されて全体として“美濃タイプ”とよぶにふさわしい在地特有の瓦群が形成されていくのであろう。

5. むすびにかえて——木曾川流域における湖東式軒瓦の展開

以上見てきたように、美濃地方における湖東式軒瓦の分布は、各務原を中心とする地域と、加茂郡内とに大きく分けることができる。しかし、この2地域は、それぞれに独立したものでなく、広い意味での美濃須衛古窯跡群における瓦の生産と、その流通の中に包摂することができる。このことは、別の見方、すなわち水運との関係から眺めれば、木曾川中流域、特に右岸を中心とした地域に遺跡の展開を見、道という視点からすれば、陸路・東山道交通網上の要地に点在するという結果を生じさせる。

いずれにしても、行政上の国あるいは郡・郷の境界を超えた物資の流通圏と、それに付随する文化の交流圏が設定され、その一つの例としてこの湖東式軒瓦の分布も位置づけられる。さらに視野を輻線文縁軒丸瓦やその他の特殊な瓦にまで広げれば、木曾川左岸の可児郡や尾張国（葉栗郡・中島郡）までも含めたより広域な交流圏を考えることもできる。

そして、この交流圏を形成し維持した集団として、各務勝氏あるいは秦人グループなどの渡来系氏族の活躍が想定される。彼ら渡来系の人々は、当時の国家的プロジェクトの一環として、在地の生産力向上という課題を担ってそれぞれの土地に入植し、農地を開発し、窯業などの手工業生産を興し、道や水運を整備し、そしてさまざまな文化を招来したものと思われる。遺跡としての古代寺院や窯跡、遺物としての瓦類は、そうした彼らの活動の足跡を現在に伝える格好の資料として、再認識・再評価なされるべきであろう。

最後になったが、本稿のテーマである湖東式軒瓦は、ほとんどの場合、一つの遺跡に一・二点～数点しか出土していない。今後の調査により出土数が増える可能性はあるが、現段階では、湖東式瓦が、他の系譜の瓦に対して量的に優位に立っているとは言い難い。この事実こそ、美濃国における湖東式軒瓦の存在意義を見いだすべきかもしれない。今後の検討課題としておきたい。

以上、話題が多岐にわたり、まとまりを欠いたものとなったが、ご寛恕を願うとともに、ご批判・ご教示をいただくことができれば幸いです。また、末筆となったが、資料の調査や本稿の執筆に当たっては、資料の所蔵者（機関）をはじめ多くの方々からご協力ならびにご助言をいただいた。以下にその名前を記し、感謝の意を表したい。（敬称略）

足立光也	井川祥子	小川雅巳	梶山勝	可児光生	篠原英政	高田康成
土山公仁	八賀晋	森郁夫	藪下浩	若尾要司	渡辺博人	
大垣市歴史民俗資料館		各務原市教育委員会		笠松町歴史民俗資料室		
坂祝町教育委員会		関市教育委員会		富加町教育委員会		
御嵩町教育委員会		美濃加茂市教育委員会		美濃加茂市立西中学校		

註

- 1) 湖東式軒瓦の特徴については、以下の諸書の記述を参照した。①特別展『近江の瓦』図録（滋賀県立近江風土記の丘資料館 1978） ②葛野泰樹「愛知郡秦荘町軽野遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-1』 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1983） ③西田弘「近江古代寺院の古瓦文様」および小笠原好彦「白鳳寺院の分布」（『近江の古代寺院』 真陽社 1989） ④小笠原好彦「近江の仏教文化」（水野正弘編『古代を考える 近江』 吉川弘文館 1992） ⑤的矢俊昭『小粕窯跡発掘調査報告書』（福井県織田町教育委員会 1994）
- 2) 湖東式軒瓦の分布については前掲『小粕窯跡発掘調査報告書』（註1の⑤）にまとめられている。なお、愛知県三河地方からも一例、湖東式の可能性のある軒平瓦出土の報告がある。岡崎市の北野廃寺の出土瓦がそれであるが、指圧波状文軒平瓦片が1点出土しただけであるため（『北野廃寺』 岡崎市教育委員会 1991）、本稿での検討対象とはしなかった。後考を待ちたい。
- 3) 井川祥子「古代美濃国における軒瓦の様相」（『岐阜市歴史博物館研究紀要』 8 1994）
- 4) 前掲註1の諸書。なお、湖東式軒瓦の年代については、小笠原好彦氏は、この様式の軒瓦の生産時期を7世紀第IV四半期としている（前掲註1の③）。これに対して、伴出品の年代観や、軒平瓦が段顎でなく曲線顎であることなどによって奈良時代前期のものとする葛野泰樹氏らの見解もある（前掲註1の②）。この湖東式軒瓦の時期設定については、出土した遺跡の状況によりそれぞれに考察し決定されねばならない。本稿においては、純粹に様式だけに限った意味で、通説に従って白鳳期の瓦の特徴をよく表したものと評価しておく。
- 5) 『古代仏教東へ一寺と窯一』1寺院編（東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会 1992）では、美濃42か所、飛騨19か所の古代寺院・遺跡および瓦窯をあげている。
- 6) ①八賀晋ほか『史跡美濃国分寺跡発掘調査報告書』（大垣市教育委員会 1969） ②同『報告書』II（1970） ③同『報告書』III（1971） ④八賀晋「歴史時代初期の美濃と飛騨」（『岐阜県史』 通史編 原始 1972）
- 7) 八賀晋前掲『報告書』（註6）
- 8) 井川祥子「古代美濃国における軒瓦の様相」（前掲註3）
- 9) 小川貫式「古代の寺院跡」（『各務原市史』 考古・民俗編 考古 1983）など。なお、軒平瓦のうち四重弧文瓦は、さらに、無顎のものと段顎の顎上に四重の沈線波状文を施すもの（図3の4）とに分類できる。
- 10) 井川祥子「古代美濃国における軒瓦の様相」（前掲註3）
- 11) 土山公仁「美濃地方の同範瓦と複弁蓮華文軒丸瓦」（『古代』 97 1994）
- 12) 小川貫式「古代の寺院跡」（前掲註9）
- 13) 小笠原好彦「近江の仏教文化」（前掲註1の④）など
- 14) ①八賀晋・玉井力「岐阜県の条里」（『岐阜県史』 通史編 古代 1971） ②長瀬仁「古代の交通と生産」（『各務原市史』 通史編 自然・原始・古代・中世 1986）
- 15) ①大江命「古代・中世の古窯跡」（『各務原市史』 考古・民俗編 考古 1983） ②渡辺博人『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』（各務原市教育委員会 1984） ③同「窯業生産」（『各務原市史』 通史編 自然・原始・古代・中世 1986）など
- 16) ①檜崎彰一・八賀晋「歴史時代」（『岐阜市史』 考古・文化財編 1979） ②小川貫式「古代の寺院跡」（前掲註9）など
- 17) 『日本三代実録』貞観8年7月9日条など。この広野河事件については野村忠夫「律令国家の成立と歩み」（『各務原市史』 通史編 自然・原始・古代・中世 1986）など参照のこと。
- 18) ①檜崎彰一他『老洞古窯跡群発掘調査報告書』（岐阜市教育委員会 1981） ②梶山勝『（特別展図録）発掘された東海の古代』（名古屋市博物館 1994） ③宇野治幸他『仲迫間遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書14 1993）
- 19) 土山公仁「美濃地方の同範瓦と複弁蓮華文軒丸瓦」（前掲註11）など
- 20) 『小粕窯跡発掘調査報告書』（前掲註1の⑤）など
- 21) 井川祥子「古代美濃国における軒瓦の様相」（前掲註3）。
- 22) 神保朔郎・吉田英敏「古代寺院址」（『美濃加茂市史』 通史編 1980）
- 23) 井川祥子「古代美濃国における軒瓦の様相」（前掲註3）
- 24) この輪形古窯跡の二種類の軒丸瓦については、実見することができなかったため、諸書に載せられた拓影や数値

などを参照した。

- 25) 先述のように『小柏窯跡発掘調査報告書』（前掲註1の⑤）では、これを湖東式の部類には属さないとしている。対して井川氏の前掲論文（註3）では、詳細不明としながらも、湖東式軒瓦の項でこの瓦をあつかっている。なお、『美濃加茂市史』（前掲註22）では、中房部のみの瓦片に一型式を与えているが、これは後述するⅢ類瓦に接合する瓦である可能性が高い。また、最近、美濃加茂市教育委員会と西中学校にて元薬師寺跡出土とされる軒丸瓦片を見る機会を得たが、入稿後であったため本文中で紹介することはできなかった。これら軒丸瓦についての考察は、後の機会を期したい。
- 26) 今回紹介する瓦片は、裏に「薬師堂跡 27卒 岩田」の書き込みがある。その記載から太田中学校（現西中）昭和27年卒の岩田某氏（おそらく郷土クラブ員であったと思われる）が採集した瓦であることが判明する。西中学校が保管する林魁一氏や郷土クラブの収集品では、元薬師寺跡からの出土品を「薬師堂（跡）」とすることが通例で、近隣の他所に別の候補地もないので、この瓦を元薬師寺跡のものとするには問題ないと思われる。
- 27) 村木誠・松居良晃・井川祥子・土山公仁「資料紹介 美濃地方の古代瓦」（『岐阜市歴史博物館研究紀要』8 1994）なお、ここで紹介された元薬師寺跡の資料は、岐阜大学教育学部郷土博物館所蔵の『古瓦拓本』に収められていたものである。また、この拓影の原資料は現在所在不明となっている。
- 28) 若尾要司「古代寺院の建立」（『御嵩町史』 通史編 上 1992）
- 29) なお、願興寺跡からは、近江系・渡来系の文化の特徴を示す輻線文縁をもつ単弁軒丸瓦が出土しており、これも注目に値する（図6の7）。また、伏見廃寺には複弁瓦だが、周縁が唐草文となっている特異な瓦が存在する。
- 30) ①神野清一「大宝二年の御野国戸籍」（『岐阜県史』 通史編 古代 1971） ②佐野一彦「律令体制と美濃加茂地方」（『美濃加茂市史』 通史編 1980） ③丹羽平一「半布里戸籍の解明」（『富加町史』下巻 通史編 1980）など。また、半布里関連の発掘調査については、④『半布里遺跡調査概報』（岐阜県教育委員会 1971） ⑤『東山浦遺跡』発掘調査報告書（富加町教育委員会 1978） ⑥『半布里遺跡』文化財調査報告書（富加町教育委員会 1987）などを参照。
- 31) 八賀晋「地方寺院の成立と歴史的背景」（『考古学研究』20巻1号 1973）など
なお、加茂郡内では、坂祝町酒倉の雲埋遺跡（北野廃寺）からも複弁蓮華文軒丸瓦片が出土している（図7の4）。この遺跡の西方に延喜式内社とされる坂祝神社があるが、同社は旧称を賀茂神社といい、この一帯も（加茂）県主グループの勢力範囲にあったと考えられる。
- 32) 前掲註18の諸書参照。
- 33) 村木誠ほか「美濃地方の古代瓦」（前掲註27）。なお、これも岐阜大学郷土博物館所蔵の『美濃古瓦拓本集 二』に収められている。
- 34) 註9参照



図8 美濃地方における湖東式軒瓦関係図

- A = 平藏寺跡 B = 東流廃寺 C = 輪形古窯跡 D = 元薬師寺跡 E = 弥勒寺跡
 - 1 山田寺跡 2 柄山古窯跡群 3 厚見寺跡 4 老洞・朝倉古窯跡 5 伊吹廃寺
 - 6 野口廃寺 7 長者屋敷廃寺 8 各務廃寺 9 音楽寺
 - 10 矢田廃寺 11 雲埋遺跡 12 神宮東遺跡 13 元万尺寺跡 14 半布里遺跡
 - 15 伏見廃寺 16 願興寺跡 17 送木廃寺 18 大杉廃寺
- ▲は、「美濃(国)」刻印須惠器出土地
 ■は、美濃須衛古窯跡群
 ※地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「岐阜」「美濃加茂」「美濃」「金山」を使用した。